

ロックミュージックの社会問題に対する影響

4年 オムニバス

2019年11月30日

目次

1. 概要
2. 差別とブルースの関係性
3. 人種の枠組みを超えたロックンロール
4. 1960年代、ロックの出現による影響
5. ウッドストックフェスティバル
6. オルタモントの悲劇
7. 1970年代 ロックミュージックの再起
8. 1970年代以降の動き
9. パンク・ロック
10. まとめ

参考文献

1. 概要

本研究の目的はロックにまつわる社会運動やフェスティバル、著名なアーティストやバンド、カウンターカルチャーの若者たちやヒッピーたちなども例に挙げて、ロックが様々な社会問題（差別、戦争、産業社会化など）に対してどのような働きかけや影響を及ぼしたのかを明らかにすることである。

2. 差別とブルースの関係

ブルースは黒人差別と深い関係があり、3. (人種の枠組みを超えたロックンロール)で述べるロックンロール(3.)ある。ブルースのルーツは1890～1900年にさかのぼる¹⁾。

黒人の奴隷制度が撤廃されて、自由の身になったが差別と重労働はなくならなかった。しかし一日の終わりに僅かな自由時間ができて、その時間に無くならない差別、それによる憂鬱、本能、明日への希望を歌った。それが今現在まで続いている「ブルース」である。

ブルースはリズム&ブルースになる。

3. 人種の枠組みを超えたロックンロール

1950年代^[4]に、ラジオでDJ アラン・フリードが、黒人音楽であるリズム&ブルースをロックンロールと呼んだ（人種によって音楽を分けない意味合いを込めて）^[3]。また、エルヴィス・プレスリー（白人の青年）や、ティーンエイジャーが出現した（大人たちの差別の価値観への反抗、自己の感性に忠実な若者）。

これらの出来事により黒人音楽は白人（主にティーンエイジャー）に聞かれるように。次第に黒人と白人の間にある壁は低くなっていった。

エルヴィスが与えた影響は分離政策のジム・クロウ法を押し返し、黒人と白人の間にある壁を低くした点で、「黒人公民権運動」とも連動していた。

4. 1960年代、ロックの出現による影響

この節でのロックは3. (人種の枠組みを超えたロックンロール)で述べた「ロックンロール」とは分けて考える^[2]。

ロックとロックンロールの共通意識は、機械化によって機械が「神」のようになってしまった社会に対する反感や怒り、または移民たちの差別による居場所のないやるせなさを思い切り表現した点である。

「ロックンロール」の怒りとは若者たちが『本能的』に共感できる強烈なビートで表現されたものである。一方、「ロック」の怒りとは複雑さを増したサウンドと文学的修辞法や心理描写などを携えた歌詞の中で表現されたもので、『理性的』である。

つまりロックは、ロックンロールの直感レベルの表現を理性レベルに引き上げた。

5. ウッドストックフェスティバル

ウッドストックフェスティバルは、1969年8月にマックス・ヤスガーの農場で行われた「愛」と「平和」をテーマとしたフェスティバルである^[2]。

初めの開催（3日間）での来客数は40万人だった。（半数以上は入場料を払わなかったため、事実上無料イベント）^[4]。

ゲイやレズビアンに対する性差別が1950～60年に禁じる法律がなかったため、ゲイやレズビアンという理由だけで逮捕や、凄まじい暴力を受け、殺人なども起きていた。それらのひどい事態に若者は反抗する。

ウッドストックフェスティバルの最中に暴力事件などがあったという報告は一度もなかったらしく、驚くほど大規模で平和な祭典だった。このフェスティバルは差別問題や反戦活動において大きな役割を果たした。

6. オルタモントの悲劇

ウッドストックフェスティバルが開催された1969年8月から4か月後の1969年12月に愛と平和と自由を掲げるオルタモントフェスティバルは開催された^[5]。ウッドストックフェスティバルに並んでロックの歴史において重要で大規模なフリーイベントである。

しかし、ウッドストックと打って変わり、オルタモントフェスティバルでは4人の死者を出してしまう悲惨な事態になってしまった。なぜこんなことが起きてしまったかというと主催者側がフェスティバルの警備として雇った白人のバイカー集団のヘルズ・エンジェルズと観客の間でライブの最中に何度も衝突が起きていて、ある黒人の青年がステージに弾の入ってない銃を向けた時エンジェルズのメンバーが黒人の青年の背中にナイフを刺して袋叩きにして殺したらしい^[5]。この黒人の青年と白人のバイカー集団の間で起きた悲惨な事件は、時代を考えると1つの社会的問題が背景にあると考えることができる。黒人公民権運動が盛んな時代で黒人労働者階層は白人労働者階層のライバル的存在になっていた。黒人公民権運動に最も反発を感じていたのは白人労働者階層だったので間接的にこの悲惨な事件が起きてしまったのではないかと福屋[1]は言ってい

る。私もこの時代背景を考えると黒人差別が完全になくなっている
と考えにくいのでそういった原因もある可能性は非常に高いと思
う。

7. 1970年代ロックミュージックの再起

1970年、69年オルタモントの悲劇の影響があり、ウッドストックやオルタモントのような大規模なフリーフェスティバルは行われなくなり、反戦活動や平和を求めて抗議する若者も少なくなった。また巨大化した音楽市場はより万人に受け入れられやすいポップミュージックが主流になってきて、ロックミュージシャンの大半は音楽業界の第一線から外れた。その状況下でロックミュージシャンたちは環境保護運動や社会的弱者の救済活動に実践を見出していた。

8. 1970年代以降の動き

ロックミュージシャンのチャリティー活動で有名なのは1971年8月にロック史上初めてのチャリティーコンサートは元ビートルズのジョージ・ハリスンとシタール奏者のラヴィ・シャンカールの2人が主催した『バングラデシュ救済コンサート』だ。エリック・クラプトンやボヴ・ディランなど豪華アーティストがノーギャラで出演した大変貴重なコンサートだ。

また日本でも1977年にジャクソン・ブラウンや泉谷しげる、細野晴臣などが出演した『鯨を救おうコンサート』が行われたこともあった。21世紀に入った2001年9月11日に世界貿易センターへのテロに対しての民衆の報復攻撃の大合唱が起きた時にも「平和の大切さ」を訴える運動を起こした。

9. パンク・ロック

1975年にイギリスで、世界中のロックの精神的な勢いが衰えていく流れに対してロックのワイルドな原初的パワーを取り戻そうとする爆発的なムーブメントが起こった。そのムーブメントを起こしたのが「パンク・ロック」である。

代表的なバンドは「セックス・ピストルズ」である。このバンドの歌詞は政府や王室、大手レコード会社などの恣意的で権威的な存在を片端からボロクソにこき下ろす内容であった^[6]。パンク思想としては「社会秩序を破壊する」であり、この社会秩序は社会に悪い影響を及ぼしていることを意味している。

10. まとめ

どんな混乱や社会問題だったとしてもロックミュージシャン達は「ロックのメッセージ性」やどうにかしようという「想い」を崩さずに立ち向かった。たとえ、その行動がオルタモントの悲劇のような失敗と思える事でも次の何かの成功に繋がっている。現在までの偉大なミュージシャンたちの行動する「姿勢」に筆者は感銘を受けた。元々「ロックミュージック」好きなのでこの題にしたのでより深く掘り下げることができた。そしてこの論文がきっかけでロックに関心を持つ人がいたらとてもうれしいです。

参考文献

- [1] 福屋利信, ロックンロールからロックへ, 近代文芸社, 2012-06-15
- [2] 矢口誠, ウッドストックがやってくる, 河出書房新社, 2009.
- [3] やんすうブログ, <https://yansue.exblog.jp/17346621/>, 投稿日時 2013-02-21, 閲覧日 2019-11-20.
- [4] ロックは演奏で決まる, 投稿日時 2006-06-04, 閲覧日 2019-11-20, <http://rock-cd.info/history/1969woodstock.html>.
- [5] megmick , 投稿日時 2012-03-03, 閲覧日 2019-11-20, <https://yaplog.jp/boogie/archive/81/yaplog/>.
- [6] サエキけんぞう, ロックとメディア社会, 新泉社, 2011.